

今週の為替相場見通し(2022年4月11日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		122.28 ~ 124.67	124.28	123.50 ~ 125.50
ユーロ	(ドル)		1.0837 ~ 1.1054	1.0875	1.0800 ~ 1.1050
(1ユーロ=)	(円)		134.30 ~ 135.64	135.16	133.50 ~ 137.00
英ポンド	(ドル)		1.2983 ~ 1.3167	1.3033	1.2900 ~ 1.3100
(1英ポンド=)	(円)	*	160.29 ~ 162.36	161.85	160.50 ~ 163.00
豪ドル	(ドル)		0.7427 ~ 0.7661	0.7460	0.7400 ~ 0.7650
(1豪ドル=)	(円)	*	91.58 ~ 94.17	92.71	91.50 ~ 94.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第二チーム 小野崎 順基

(1) 今週の予想レンジ: 123.50 ~ 125.50 円

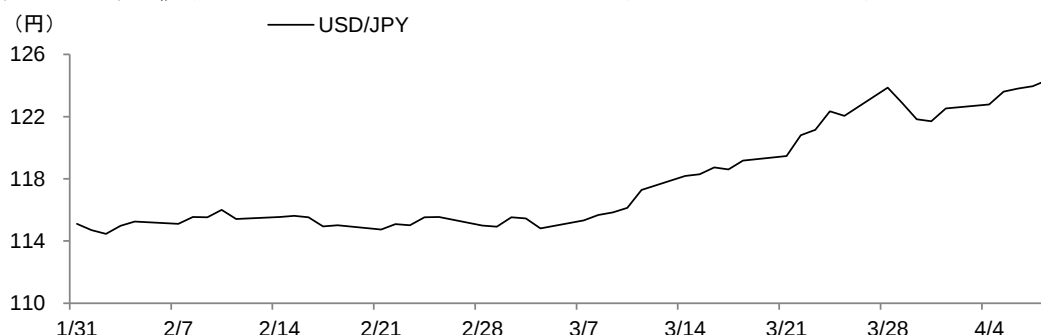
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週半ばに急上昇し、堅調さを維持した。週初4日、122.60円付近でオープンしたドル/円は仲値にかけてドル売りが加速し、一時週安値の122.28円まで下落も、売り一巡後はロシア・ウクライナ情勢の悪化と米金利上昇にサポートされてじり高に推移し122円後半まで上昇した。5日は東京時間で黒田日銀総裁による円安牽制発言により一時値を下げるも、海外時間ではブレイナードFRB理事によるタカ派的な発言や米長期金利上昇にドル買いが加速、123円台半ばまで急伸した。6日は前日海外時間のドル買いの流れが継続、米長期金利上昇も相まって一時124.05円をつけた後、海外時間では米国株式市場の軟調推移やFOMC議事要旨公開後のポジション調整に伴って123円台半ばまで下落し、その後も上値の重い値動きとなった。7日、ドル/円は123円台後半で揉み合いだったが日経平均株価の大幅下落に123円台半ばまで下落し、その後はやや材料に欠いて方向感なく推移。米国時間に入ると、米新規失業保険申請件数の良好な結果や株式市場の堅調推移にサポートされて124円ちょうどまで値を戻した。8日には目立った材料は無かったもののFRBによる金融引き締めが意識される中で米10年債利回りは2019年3月以来の水準となる2.72%台まで上昇するとドル/円も124.67円と週高値を付けた。

今週は年初来高値の125円台を目指しつつも上値追いも限られる展開か。注目すべきは、ウクライナ情勢や米国からの3月消費者物価指数を見極めつつ5月FOMCでの+50bp利上げやバランスシート縮小開始の可能性を見極める必要のある展開となろう。5月開催のFOMCでは+50bpの利上げ実施が有力視されるも、3月のFOMC議事要旨では「3月会合では多くの参加者が+50bpの利上げを支持するも、ロシアのウクライナ侵攻で+25bpの利上げに修正した」とされており、5月のFOMCでも+25bp利上げに留まる可能性あり、ウクライナ情勢を巡るヘッドラインに注視すべき状況は続く。一方で米3月消費者物価指数は原油価格の高止まりや雇用情勢の改善からの賃金上昇、ISM指数の物価指数の上振れから2月に見せた前年比+7.9%を上回り1982年1月の+8.3%に迫る可能性もある。米3月消費者物価指数にて強めの数字が出てくるとドル買い圧力となることは想定される。この他では黒田日銀総裁の「円安スピードは急」との言葉や政府関係者からの円安牽制の声、また、米財務省が今週公表予定の為替報告書からも毎回、「日銀の大規模な金融緩和が円安要因」と言及されており、これらは上値を抑える材料として懸念される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/4~4/8)の値動き: 安値 122.28 円 高値 124.67 円 終値 124.28 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 上遠野 暁洋

(1) 今週の予想レンジ: 1.0800 ~ 1.1050 133.50 ~ 137.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は下落。週を通して上値の重い展開となった。週初4日、1.1047でオープンしたユーロ/ドルは朝方に一時高値1.1054まで上昇し1.10台半ばでの小動きとなるも、海外時間には欧米諸国による対ロ制裁強化の思惑からユーロ売りが加速し1.09台半ばまで急落。ユーロ/円も134円半ばまで下落する展開となった。5日も1.09台後半での小動きした後、米長期金利の上昇に伴うドル買いに押されユーロは対ドル1.09ちょうどまで下落し、ユーロ/円も134.30円までの続落に。6日も米金利の堅調推移を眺めたドル買い継続からユーロ/ドルは1.0879まで下値切り下げ。FOMC議事要旨後のポジション調整にやや戻す場面があるも、持ち直しは鈍く1.08台後半で上値の重い推移となった。他方ユーロ/円は135円を挟み方向感に乏しく推移。7日は、先月行われたECB政策理事会議事要旨のタカ派的內容に1.09台前半まで回復するも、その後は欧米の対ロ制裁強化の動きや米長期金利が再び上昇に転じる動きに1.0865まで下落。ユーロ/円はドル/円の上昇にもサポートされ135円を挟んだ推移を継続。8日は週末を前にウクライナ情勢や仏大統領選への不透明感からユーロ売りの流れを継続し、一時1.0837と約1ヶ月ぶり安値を更新。もともと、節目1.08ちょうどを前に反発。ユーロクロスの上昇にもサポートされ1.08半ばまで戻し、ユーロ/円も135円前半での越週となった。

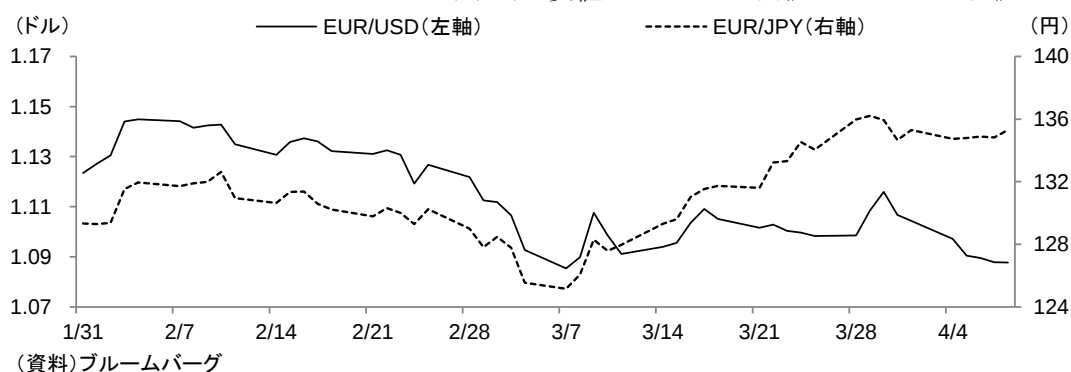
今週のユーロ相場は反発を予想。14日(木)開催予定のECB政策理事会において前回3月ECB政策理事会のタカ派路線を継続できるかが焦点。先週発表された3月ECB政策理事会の議事要旨においては、多くのメンバーが足許インフレの高止まり懸念を指摘し、「金融政策正常化に向けたさらなる措置を早急に講じる必要がある」と主張していたこと、またAPPを夏に終了するのであれば7~9月の利上げが明確になる可能性や、一部委員が夏のAPP終了に向けて明確なスケジュールを要求したことが明らかとなりタカ派内容と受け止められた。依然混迷するウクライナ情勢や欧米の対ロ制裁、難民の受け入れ等経済下押し圧力への懸念は根強いものの、大方の参加者が意識する物価の上昇圧力は止まらず(月初公表された3月消費者物価指数(HICP)は前年比+7.5%と過去最高の数字更新)、目下インフレへの早期対応を優先し金融政策の引き締めに向けて踏み込んだ内容となることを予想。ウクライナ情勢を巡るヘッドラインに目を配りつつも、ECB後にユーロは買い戻される展開を想定しておきたい。その他、週内主な経済指標として、12日(火)独4月ZEW景気期待指数、13日(水)ユーロ圏2月鉱工業生産、英3月CPI等を予定。仏大統領選については24日の決選投票へもつれ込む公算から様子見ムード継続か。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/4~4/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0837 高値 1.1054 終値 1.0875

(対円) 安値 134.30 高値 135.64 終値 135.16



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.2900 ~ 1.3100 160.50 ~ 163.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは下落。8日には直近安値(3月15日の1.3000)を割り込み、17か月ぶりの安値を1.2983まで広げた。ただし、主要通貨に対するポンド安は対ドルだけで、対円、対ユーロなどでポンドはむしろ堅調気味に推移した。つまり、対ドルでのポンド安も、ドル高の結果だったわけだが、ドルの上昇を支えたのは、引き続き、米連銀による積極的な金融政策正常化(金融引き締めの前倒し)に向けた思惑だった。5日には、ハト派寄りと目されていたブレイナードFRB理事が、同銀バランスシートの縮小(QT)を(市場の織り込み以上に)加速させる可能性に言及。6日公表された3月公開市場委員会の議事要旨が、月額合計950億ドル程度のバランスシート縮小を示唆したのは、この時点までに市場で織り込まれていた通りの内容だったものの、7日以降、週末までは、同銀が急激な利上げを実施する可能性がドルを押し上げた。同銀の中でもタカ派筆頭に挙げられるセントルイス連銀ブラード総裁の発言ではあったものの、年内に+275bpもの追加利上げを示唆した事実には、相応の驚きもあったようだ。実のところ、ポンドは、週初、堅調気味の滑り出しを見せた。4日の対ユーロでの上昇は、EUによる対ロ追加制裁が観測されたことで、ユーロ圏景気に悪影響する可能性が懸念されたユーロ全面安の裏返しだったが、5日には、発表された英各種購買部指数(PMI)の3月確報値が(暫定値から)明確に上方修正されたことが好感された。この局面、ポンドは全面高に振れ、対ドルでも週の高値となる1.3167まで上昇したが、直後に、上述ブレイナード理事の発言を受けて反落。その後、週引けまで対円、対ユーロで高止まりする一方、対ドルでは断続的に水準を切り下げた。

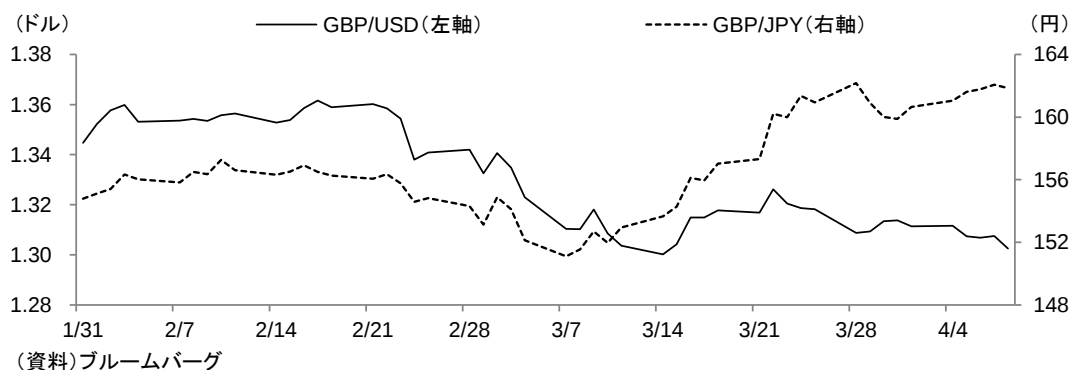
今週の英ポンド相場は、方向感を欠いた横ばいを予想。上述の通り、この間のポンドの値動きは、ほとんどがドル側の要因、ユーロ側の要因によるもので、ポンド側の要因が作った値幅はほぼ限定的と言えた。確かに、対円、対ユーロでの堅調は、ポンドがドル側の通貨=利上げで先行する通貨である事実を意識させる。ただ、昨年12月、米連銀に先行して利上げに踏み切ったものの、その後は、米連銀が積極的な金融引き締め姿勢を強めているのとは対照的に、英中銀は、むしろすっかり腰が引けてしまった感が強い。ポンドに過度に強気になれない状況と言えよう。そういう目線で、今週、11日(月)の英2月貿易収支の他、12日(火)に英12~2月平均賃金、13日(水)に英3月CPIといった物価関連指標の発表が並ぶのは興味深いものの、余程意外感のある数字でも出ない限り、単月の数字が、「今後も慎重な利上げ姿勢を維持する」との見通しを大きく変化させる可能性は考え難いだろう。英国内のニュースは、一時の、「朝から晩までウクライナ情勢」から、漸くその他のニュースも報じられるようになった状況だが、その中で、ひとつ目を引くのは、スナク財務相の妻が、税務上、英国居住者ではなかった(英国では納税せず、インド居住者としてインドで納税している)との報。ジョンソン首相の「(コロナロックダウン中の)パーティ疑惑」に続き、つくづく醜聞の絶えない現保守党政権だが、この報が英政局に大きな不透明感を持ち込む可能性は考え難い。ウクライナ紛争のおかげですっかり「落ち着いて」しまった英政局が金融市場で仮に材料視されるとしたら、5月の統一地方選前後ということになろう。対円、対ユーロでは、引き続き堅調推移が支配的になるものと見込む一方、対ドルでは、一旦割り込んでその後反発した1.30水準を、仮に再び割り込むようなことがあれば、もう一段の取引レンジ切り下げを見込んだテクニカルなポンド売りを誘う可能性も考えられよう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/4~4/8)の値動き:

(対ドル) 安値 1.2983 高値 1.3167 終値 1.3033

(対円) 安値 160.29 高値 162.36 終値 161.85



4. 豪ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 木村 優太

(1)今週の予想レンジ: 0.7400 ~ 0.7650 91.50 ~ 94.50 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は上に往って来いで推移した。週初4日は0.7486でスタート。EUが対露追加経済制裁を実施するという見方が強まる中、対ユーロでAUDが上昇。NY市場オープン後に株価が上昇幅を拡大すると0.7550近辺まで上昇。5日に行われたRBAでは政策金利は据え置きとなったものの、声明文では「忍耐強い対応を続ける」との表現が削除されたことでAUD買いが進行し、週高値は昨年6月以来の0.7661まで上昇。その後ハト派で知られるブレイナードFRB理事がバランスシート縮小を急速に加速させると言及したことで米金利が急上昇し一転USD買いが進行し0.7580近辺まで下落。6日は発表されたFOMC議事要旨では多くの参加者が次の5月FOMCにて大幅な利上げ(+50bp)が適切と見ていたことが明らかとなり、株安UDドル高で反応し、一時0.75割れの水準まで下落。7日に発表された豪2月貿易収支は前月から縮小し、さらにブラード・セントルイス連銀総裁は今年下期に政策金利を3.00~3.25%まで引き上げることが望ましいと述べ、米長期金利が上昇しUSDが買われ、0.74後半まで下落。8日は特段の材料はないものの米長期金利が続伸する中でさらなるUSD買いが継続。週初のレベルを割り込み週安値の0.7427まで下落し、0.7460での越週となった。

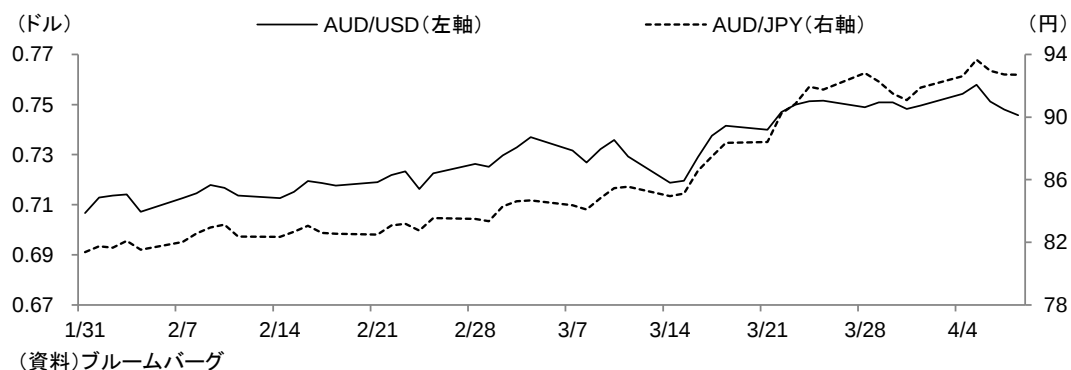
今週の豪ドル相場は底堅い推移を見込む。先週はRBAの内容を受けてAUD買いが進んだもののブレイナードFRB理事のタカ派な発言を機に米国の利上げペース加速を見込んだ金利上昇が進んだことで反落し、終わってみれば週初より低い水準となった。米国の利上げペース加速は今年の世界的なテーマであり、米金利上昇に対する警戒感は相応に強い。ただし、同様に高金利通貨と呼ばれるAUDは金利差を受けての売りは続きにくいと見込まれ、現在の金利水準が織り込まれ株式市場が回復するにつれて、リスクオンの買いが入ることが想定される。また、今週はニュージーランドの中銀金融政策決定会合を13日(水)に予定している。昨年のニュージーランドは豪州より積極的に金融緩和からの脱却を進めてきたことおり、今回も+25bpの利上げが予想されているが、内容次第ではオセアニア地域での金融政策方針の違いが意識され、豪ドルの値動きにも影響が出ることに注意したい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(4/4~4/8)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7427 高値 0.7661 終値 0.7460

(対円) 安値 91.58 高値 94.17 終値 92.71



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。